

# 指定都市市長会シンポジウム in K O B E 講演録

平成24年6月2日

## 【主催者挨拶】

神戸市長、指定都市市長会会長

矢田立郎

今日は指定都市市長会が主催をいたしますシンポジウムにたくさんの皆さんにお集まりいただきましたことにまず御礼申し上げます。

私どもが指定都市市長会を立ち上げたのは平成 15 年のことで、その当時の政令指定都市の数は全体で 13 でしたが、今年 4 月に熊本市が加入して 20 になりました。私は指定都市市長会の会長も仰せつかっております。大都市制度のあり方について、今いろんな議論が行われていますけれども、これは言い続けられて実は久しいわけです。しかしなかなか日本の国の政治の中で大都市制度をどのように位置づけていくかという点についてはいろんな問題をはらんでいると言わざるを得ないと思っています。なぜかという、指定都市は基礎的自治体でありますので住民と直結する部分の仕事を当然行いますが、あわせて、法律に定められている大都市特例の仕事も行っております。そのほかに、連携する広域の地域のことについてもいろんな形で中枢として機能する役割があります。そう考える時に、都市としてベースとなる権限あるいは財源について一体どうあるべきかについて過去ずっと論じられてきたわけですが、議論だけは進むが、なかなか実行が伴ってきませんでした。

大都市制度のあり方については政令市の中でもいろんな声が挙がってきました。横浜の人口は 360 万人、大阪は 260 万人、後は名古屋、京都、神戸と大都市が連なっているのですが、最近政令市になった都市は 70 万人、80 万人というところが多いわけです。ですからそれぞれが地域の中核ではありますが必然的にその形態は少しずつ違ってきます。その中で、これから日本の国が大きな力で牽引していく役割の一つに大都市制度があるわけでございます。また大都市が自らそういう気持ちで牽引していくことが求められているわけです。

本日、基調講演をしていただく林先生には「大都市が果たすべき役割と大都市制度」ということでお話を頂戴いたします。林先生は大都市制度そのもののほか、国の地方制度をどのように変えていくのかということで地方制度調査会の委員もされています。示唆に富んだお話をいただけるのではないかと思います。

パネルディスカッションでは、小説家の玉岡かおるさん、神戸新聞社社長の高土薫さん、に参加いただき、これからの神戸のあり方も含めているようなお話を頂戴できたらと思っています。これからの神戸市は、安心して安全に暮らせる街であるとともに、この日本を牽引する大きな役割を持った都市として発展を遂げていくことが求められていると思います。本日のシンポジウムに期待をしていただきまして、これからも、自らがお住まいの神戸の街をどのように方向付けをしていくのかという点についてご意見を賜ればと思っています。どうか最後まで皆さんの力でシンポジウムを大いに盛り上げていただけますことをお願い申し上げます。冒頭のあいさつとさせていただきます。よろしくようお願い申し上げます。

## 【基調講演】

### 「大都市が果たすべき役割と大都市制度」

関西学院大学経済学部教授 第30次地方制度調査委員会委員

林 宜嗣

今日のタイトルは「大都市が果たすべき役割と大都市制度」となっていますが、これが本来の姿です。しかし、今は残念ながら大都市制度ばかりが議論の対象になっていて、一体大都市ってどういう役割を果たすべきなのかという話が欠落してしまっているような気がします。かつての大都市というのは旧5大都市、その中には神戸も入っています。そういう中ではほとんど共通の課題を抱えていたわけです。地方からどんどん人が入ってきて、企業もどんどん増えてくる。こういう過密問題を何とかしなければいけない。住宅を作らなければいけない。そういう課題は神戸も大阪も大都市が共通で抱えていた問題でありました。したがって、国が画一的な制度を作ってもそれなりに役に立ってきた。ところが現在、20にまで増えた指定都市の中には、人口70万、80万のところから360万、370万というところまであります。これだけ幅広い人口を抱え、性格的にも中心になるような都市と首都圏では、その周辺の住宅都市としての大都市がある、というように性格が大きく変わってきています。今までのような大都市制度を画一的にすべての都市に適用することができなくなりました。しかも大都市って何だろうということもなかなか決めにくなっているわけです。そういう時代に大都市制度を考えていこうとするならば、やはりそれぞれの地域に合った大都市制度を考えていかなければならない。これが今の大きな課題だろうと思います。

今、日本で幸福論が大きな課題になっています。日本では、もっと質的豊かさ、あるいは心の豊かさを求めていかなければならないのではないかと、というようなことがずいぶん以前から言われていました。実は、その時の課題は、高度成長によって出てくる様々な副作用を何とかしなければいけないということから出てきたもので、GDPでは幸せを測れないよというような話でした。しかし、今の日本の幸福論は、それとは様相が異なっていると思います。すでに日本は高度成長を望むべくもない。これからはできるだけパイを小さくしないようにしていく。そういう時代です。しかも国民の考え方は多様になっていきますから、どのようにして満足を最大にしていくのかということが大きな課題になってきました。その中で出てきた幸福論だと私は思います。

とすると、ここから大都市制度を考えていく時にも、やはり右肩上がりにならないにしても、これからどんどん人口が減少し、グローバル社会の中で日本のプレゼンスがだんだん小さくなっていくわけですが、そういうことを少しでも食い止めなければいけない、ということが一つあります。

それからもう一つは選択肢をどれだけ増やしていけるかということだろうと思います。パイが大きくならないなら、せめて自分が望んでいることに所得を使えるようにしたい。

あるいは市民が納めた税金が地域のニーズに合った形で使われるような、そういう仕組みを作るといことがこれからの大都市制度の中では非常に重要な課題になってくると思います。

そういう中でいろんなところで大都市制度が話題になっています。特に大阪都構想が出てから、中京都構想、新潟州というようないろんな制度論が出ているわけですが、実は制度論から入ると行き着くところが見えなくなってしまいます。つまり大都市はどういう役割を果たすべきなのか。あるいは神戸市は今後どのような姿を目指していくべきなのか。それを踏まえた上で、そのためにどのような政策課題を抱えているのか、その課題を解決のためにはどのような手段が必要なのか、ということを考えていく必要がある。そして、実際にその手段を実際に使わなければ、今の制度がよくないというような話は出来ないわけで、まずはやってみよう、始めてみようということが大事です。今の制度のままではこれをやりたいと思っても十分にできない、ということがわかって、初めて制度論に入っていくべきだと思うんです。私自身は今の制度の中でもいろんなことがやれると思います。やらないままに、これは制度が問題だ、2重行政だと言うわけですが、その2重行政は今の制度の中でやめようと思えばいくらでもやめられるんです。あるいは2重行政は本当に悪いのだからと考えると、実は役割分担しながら、同じ目的を果たそうとしているんだということがわかるかもしれません。ですから、いきなり制度論に入ってしまうのはよくありません。

私が所属している地方制度調査会でも残念ながら制度論から入っています。大都市制度が出来上がってきた歴史的経緯はこうですよ、東京の場合は都と区の関係はこうですよ、外国ではこんな制度がありますよ、そういう話になっています。そうではなくて今それぞれの地域が、東京一極集中あるいはグローバル社会の中で抱える様々な課題を具体的に抽出して、それを解決するための制度はいかにあるべきなのか、という視点から大都市制度を考えていく必要があるだろうと私は考えています。しかし、そうすると全国画一の大都市制度を構築することはおよそ不可能であります。それよりもむしろそれぞれの地域が抱えている課題、そしてそれを実現、解決するための政策手段を踏まえて、制度論にどんどん市民を巻き込む形で展開していくことが、本当の意味での地方分権型の大都市制度論に結びついていくのだろうと思っています。そうすると国も、比較的緩やかな枠組みや形で制度を作っていくことになるかもしれません。そういうことが今の国の役割ではないかと思っています。

大都市は、企業や市民、あるいは様々な経済的、社会的主体が行動していくための容れ物です。ただ、容れ物の形を作っている様々な要素を全部ひっくるめて容れ物だと考えていかなければなりません。たとえば土地があるから工場を作ってください、安い労働力があるから来ててください、これではだめです。人件費、土地のもっと安いところは世界中にあります。大都市はそういう土地だとかバスケットを提供する場ではなくて、むしろ様々な要素を含んだかたちでの容れ物であって、そういうものをこれから作って行って、提供

していくことができれば、外国からもっと企業が来るかもしれない、あるいは他の地域から企業が来るかもしれない、そういう容れ物づくりが大事だと思います。この容れ物が企業や市民の活動と合わなくなってしまった時にはどうするか。容れ物を早く作り直さなければなりません。ところが今の中央集権型のシステムの中では、容れ物を作り直したいと思っても権限、財源、時間がないということになってしまっているために、民間の経済活動がその容れ物を捨ててほかのもっとふさわしい容れ物のところに移ってしまいます。グローバル社会の中で新興国家に工場、生産現場を移していくといったように、それが今日日本全体で起こってしまっているのです。地域と地域の関係、それは場合によっては連携かもしれないし、競争かもしれない。そういうような地域と地域、あるいは個人と個人の間を密接につなげていき、あるいは競争していく。これがグローバル社会であります。しかしながら今の日本の制度は残念ながらグローバル社会に対応した制度にはなっていません。依然として国単位で様々な問題を考えるという形になってしまっているために、個人も地域もグローバル社会に対応できるようなかたちになっていないのが今の実態ではないかと思えます。国全体が地域に対してグローバル社会にふさわしいそういう様々なガバナンス、マネジメントが持てるようなシステムを早く作っていかねばなりません。それは国がやらなければならない仕事だと思っています。その一方で地域は今やれることを一生懸命やってみる。そういう中で、グローバル社会にふさわしい都市、地域が生まれていくんだらうと思えます。

先進国、日本の大都市は、これからももちろん経済開発もやっていかないといけないでしょう。グローバル時代にふさわしい知識集約型の製造業であったり、ものづくりであったり、それと同時に居住環境、文化、教育そういう様々な社会的環境づくりを同時に行っていくことによってグローバル時代にふさわしい都市という容れ物ができあがります。こういうものを総合的に作り上げていく権限、財源が今それぞれの都市に本当に備わっているかどうか大きなポイントであって、そういうものの制度上の問題点をこういう形で抽出して明らかにすることによって大都市制度を変えていかねばなりません。

大都市が果たすべき役割についてお話しします。大都市には二つの顔があります。一つは基礎自治体としての顔です。人口数千人、数万人の自治体と同じような仕事をやらねばなりません。そして、もう一つは広域自治体としての顔を持たなければいけないということです。神戸市には昼間、多くの人たちが通勤で流入しています。大阪であれば毎日100万人を超える人たちが市内、市域外から流入するわけです。おそらく神戸市でも規模は違えど同じようなことが起きています。もし神戸市で働く場がなくなったら、明石市の人口は減ります。大阪の経済活動が弱くなったら宝塚市や西宮市の人口も減ります。そういう意味では大都市は基礎自治体ですけれども周辺のエリアも含めた地域の中核都市、あるいは地域の中核的な機能を担っているのです。こういうことを同時に実現していかなければなりません。

もちろん基礎自治体としての役割を考えるなら、神戸市の人口は150万人ですから、そ

ういう意味では住民の声が聞こえにくくなっているのではないかという気がしています。そうするとやっぱり都市内分権をもっと進めていくことも考えていかなければならないのかもしれない。しかし、今日は、その点は置いておいて、むしろ神戸市あるいは大都市が地域の中核機能をいかに果たしていくのかということに大都市本来のあるべき姿が見られるのではないかと考えています。

東京一極集中がどんどん進んでいます。東京に住んでいる方は、東京に集中するのは日本全体のためにプラス、とおっしゃいますが、私はそう思っていません。一極集中はここ数年はそれなりに機能するかもしれませんが、しかし、ロンドン、パリ、ニューヨークなどそれぞれの国で最大の人口を持つ都市のその国全体の人口に占める比率の推移を見るとほぼ横ばいなのですが、東京だけがどんどん伸びていて、しかもこれからもどんどん高くなっていこうとしています。これは先進国では異例です。これを放置したままでそれぞれの地域にがんばってくださいね、というわけにはいかないんです。だからやっぱり東京一極集中の大きな流れを国が止めていかなければいけない。つまり地域をもっと活性化させるには、そのためのシステムを作っていかなければならないと私は思っています。神戸市、大阪市がいくらがんばっても、首都圏にある都市の方の魅力が高ければ、そちらに動いていきます。それが大きな一つの問題であろうと思っています。

ヨーロッパでは、一極集中を是正しなければ国の経済のサステナビリティはなくなるといのが共通認識になっています。イギリスのシンクタンクが出したディスカッションペーパーには、今までのようにイギリスがロンドンに依存していく限りにおいてはイギリス全体の経済のサステナビリティはなくなるといことが広く認識されている、ということが書かれています。ところが日本では残念ながら東京が大きくなると日本はだめだとい認識が依然として大きい。この認識はイギリスだけではありません。パリも同じです。ドイツの経済は今元気ですが、それぞれの地域ががんばったら報われるというシステムを備えていることが地域を発展させているのです。こういうシステムを日本は本気で考えないといけません。実は自治体もそういう視点で努力をしていかなければならないと思います。自治体の果たすべき役割が非常に大きく変化してきているということも認識しないといけません。

日本は実はローカルガバメント、つまり地方政府になっていないとよく言われます。だから早くローカルガバメントにしなければいけない、ということをするのですが、実はもうヨーロッパでは、あるいはアメリカでも、すでにガバメントという発想自体が時代遅れになっているんです。ガバメントからガバナンスへ、という動きが今見られています。つまり今までは政府・自治体がいるんなことをやりますよ、というような時代だった。ところがこれからは、民間の経済主体、市民、NPO、NGO、そういう様々な主体があって、その一つが自治体であり、とりわけこの自治体が経済、社会主体をうまくまとめ、コーディネートしていくという役割を果たしていかなければならないということが、もう一般化されているわけです。だから今までだったらビジネスチャンスを自治体がつくるということ

はあまり考えなくてもよくて、ただ工場を呼んでくればよかったのです。だけど今からは、この地域にふさわしいビジネスって何だ、とそういうことも含めて民間企業、そして市民と一緒に知恵を出しエネルギーを注いでいく。そのためのガバナンスはいかにあるべきかをこれからは考えていかなければならない。そういう時代に入ってきていて、それにふさわしい制度を構築していく必要があると思っています。

イングランドはシティリージョン政策が一般的です。フランスあるいはそれ以外の北欧の国々でもシティリージョンという考え方が本当に大きく出てきています。今までの制度は行政区域単位でさまざまな課題を解決しようとしていたのですが、大都市のように、あるいは大都市圏にある都市と周辺の都市の関係のように、それぞれの自治体が行政区域単位で課題を解決するのが難しいということでシティリージョンという考え方が共通認識として生まれてきているわけです。そのためには一体どのような制度を作ればいいのかという視点が大事だろうと思っています。

イギリスも大陸の都市に比べると経済的には見劣りをしています。政府はそのことに強い危機意識を感じて、これをもっと強化していくためにはどのようなシステムを作ればいいのかということで出来上がった考え方がシティリージョン政策です。この考え方は前の政権の労働党が考え、強力に進めようとした制度であります。その後労働党が総選挙に負けて、現在、連立政権が政策を担っています。連立政権では労働党政権が各イングランドの地域に作った地域開発のための総合出先機関は廃止し、その代わりに我々はローカルエンタープライズパートナーシップ(LEP)をつくりました。LEPは、地域の自治体と企業がパートナーシップの関係を結んで、その地域の開発、とりわけ経済に関することについて一緒になって考え、議論し、そして共同で進めていこうとする計画です。政権発足後直ちに大臣の連名でシティリージョンの中にある自治体の長に手紙を送りました。一方で経済界にも同じ手紙を送っています。「それぞれの地域で自治体と経済界が共同でLEP計画をつくってくれ」という内容でした。そして何ヵ月か後にその計画の概要を送り返せ、ということをやったのです。そしてLEPのための委員会を作りました。委員会には自治体、企業が同数の委員構成で座長はビジネスパーソンです。そこで議論して、例えばマンチェスターであれば、広域マンチェスターをどのようにしていくかということを経験していただき、そして計画を作ってください、インフラの優先順位を考えてください、地域の都市計画を考えてください、といったようなことを話し合うのです。これによって地域の民間活力を大きくしていく、といったようなことを伝えた上で政策を進めようとしている。イギリスにできてなぜ日本でできないのかということをもっと徹底的に考えていかなければなりません。「いや日本はなかなか難しいんですよ」では話は進みません。なぜを難しいのかを突き詰めないと考えていかなければならないだろうと私は思っています。

今、経済学をベースにして神戸市はかくあるべしといったような絵を描くことは可能です。しかしそこに至るまでのプロセスを十分に議論したり、あるいはそれに基づいた行動を起こしたりするというようなことがなければ、絵に描いた餅で終わってしまいます。こ

れからは市民目線、あるいは市民の手によってこの大都市・神戸をどのように変えていくかについて本気で市民が考えなければならない、そういう時に来ていると思います。よく私たちに、地方分権、大都市制度って難しい、これら制度についてどんなことがメリットなのかわかりやすく説明してください、と言われることがよくあります。しかし冒頭申し上げたように、地域はそれぞれ違った特徴を持っていますし、違った課題を抱えています。それぞれの課題が違うからこそ地方分権を進めていかなければいけないのです。ですからそれぞれの地域でもっと議論をしていくことが必要だと思います。地方分権の議論、大都市制度の議論は地域の研究というところから始まって答えが出てくるのではないかと私は思っています。

大都市再生における市民の役割についてですが、グローバル社会だからこそ地域や都市の比重が大きくなるということをまず認識をしていただきたいと思います。国が何かやるのではなく、地域がやらなければいけない時代なのです。そして、分権と連携はコインの裏表の関係にあるということへの認識も必要です。分権を進めていくためには一方で連携が必要だということでもあります。EUは今、大きな曲がり角にさしかかっていますが、一つにまとまっていかなければならないのはなぜかという、アメリカという強大な力に対抗するために、イギリスだ、フランスだ、ドイツだなどというようなことを言っている時代ではなくて、むしろ手を結んで国家主権を若干犠牲にしてでもヨーロッパとしての共同のパートナーシップを築こうとしているからなのです。大都市制度、地方分権を考える時に、地方分権だからそれぞれの地域がやりたいようにやれるようにしてほしい、ということではなくて、一方で連携をどうやって深めていくか、地域間の連携と同時に、企業と自治体、市民の連携をいかにして構築していくのか、といったような様々なパートナーシップを結び付けて実現していくことが、私は自治体に求められる役割ではないかと思っています。自治体というのは触媒の役割を果たさないといけないのです。自治体が何もかもやりますよ、という時代ではありません。地域の活性化には一体何が必要なのか、神戸の課題は何だろうか、その課題を解決するためにはどのようなシステムが備わっていなければならないのだろうか、ということをも市民一人ひとりが考える。つまり、改革を進めるプロセスにおいていかに住民が参加し、市民の都市づくりへの意識が高まっていくかが重要で、大都市制度がうまく構築されるかはそこにかかっているといっても過言ではないと思っています。そして神戸はこのような制度にしてほしい、ということをも国にぶつけていく。他の都市はまた違った形でぶつけていくと思います。それを集めてきて、じゃあ国はどのような規制緩和をしたほうがいいのか、あるいは場合によっては一つの共通の課題を国として考えていかなければならないのかということになっていくわけですね。それが私の所属している地方制度調査会のこれからのあるべき姿だと思っています。

改革をすれば必ず副作用が出てきます。副作用が起らないような改革は意味がありません。日本は今まで制度を微調整する形でその時その時の課題をしのいできました。しかしながら今や大きく社会は変わりました。したがって、もはや制度の微調整では充分に対



応することは出来ないのです。つまり政策のパラダイムが大きく変わったということです。改革をすれば必ず副作用が必ず出てきますが、今までの日本の議論は副作用が出てくると、とその副作用ばかりに目がいて、こういう問題点が起こるからなかなかしんどいというようなかたちで議論が進んできました。そうではなくて、改革によって出てくる副作用は確かにあるかもしれないが、しかしながらそれをどうしたら解決できるかというところに市民の知恵を絞っていく。そういう時代に入ってきているのではないかと思っています。

持続可能な神戸を実現するためにも、今日、明日、来年、再来年も大事ですけども、20年、30年先にこの神戸をどのような姿に持っていくかという長期的視野でもって皆様方が地域づくりに協力していくということを切に願っている次第でございます。

### 【パネルディスカッション】

#### 「これからの神戸を考える」

##### <パネリスト>

林 宜嗣 (関西学院大学経済学部教授 第30次地方制度調査委員会委員)

玉岡 かおる (小説家)

高士 薫 (神戸新聞社代表取締役社長)

矢田 立郎 (神戸市長)

##### <司会・進行>

三上 公也 (ラジオ関西アナウンサー)

司会)

パネルディスカッションを始めさせていただきます。まずは紅一点、玉岡さんに口火を切っていただきたいと思います。ご自身の神戸との関わり、神戸の魅力、神戸の課題についていろいろお考えだと思いたいますがいかがでしょうか。

玉岡 氏)

林先生のお話で一番私が自分自身のことを言っていたらと分かったのが、マンチェスターの例でお話をいただいた広域都市という言葉です。実は私は神戸で生まれ育ったわけでもなく、今も住んでいるわけではないのに、神戸の作家という認識されています。実は私は神戸をちょっと一歩踏み出した三木市に生まれ、大学は神戸を一歩踏み出した西宮にある神戸と名前のついた大学に通い、車のナンバーは神戸でした。作家としてデビューした時にも神戸文学賞をいただいたということで、東京に行くとみな神戸の人間と思ってくれているわけですが、実は神戸の周辺で生まれ育って、青春時代を過ごし、家庭を築き、娘二人も神戸周辺で私と同じように成長していきました。まさに神戸は神戸市だけの

ものではないということ私を私の人生そのもので実感していたところへ林先生は広域と表現してくださった。私は別の言葉で表現していました。熱帯の周辺にある気候帯を亜熱帯地域といいます、その亜を使っていつも自分で「亜神戸っ子」と呼んでいたのですが、これからそれを言わなくて済む。「広域神戸っ子」です、「広域神戸人」です、という表現をさせていただけるなと思って、今日先生から1個いただいて帰ります。

本当に神戸が低迷してしまうと周辺も低迷するという感じだと思います。逆に神戸が魅力あって、光輝いているからこそ周辺の亜神戸っ子もなんとなく神戸の輝きをもらいながら育ってきたところがあります。少女時代に神戸に来ると、人が溢れていました。そして三木にはない素晴らしい、外国から輸入されてきた絵本、カラフルな物語を読みながら想像力をたくましくしたからこそ今日の私の文学世界がある。神戸に来ると文化があった、物があった、そして何より素敵な人があった。やはり神戸は人でしょうと言いたい。

神戸の人で何と言っても素晴らしいのは女性だと思います。これは女性雑誌なり普通の雑誌で、ファッションとなると東京の敵になりうるわけです。神戸ファッション、神戸マダムというのが出ていくと、おしゃれやね、素敵やねということで、勝ち負けではないんでしょうが、神戸の名前を知らしめることが出来る。東京に出て6年になる娘が、神戸に帰ってくるたびに、輝きが違うと言います。東京は確かに力もあって、緑もあって、ビルもあり、確かに街そのものは整っているけれど、その間を呼吸をして生きている人の彩りが無いと言います。おしゃれというのはみなイメージして作ったものではなく、一人ひとりが自然に神戸の街を泳ぐようにして生きながら身につけたものではないか。それが神戸の魅力だと思います。それは何かというと、かつての神戸の主産業であった真珠を選別するのに適した光があります。神戸の北側光線というそうですが、六甲山から振り注ぐ、直射日光なんだけれども、山を通して降り注ぐ太陽によると真珠の選別にすごくいい光です。その光が私たちに自然に彩りを与えてくれているように思います。なんとなく日本人の感覚に昔ながらに備わっていた季節と彩りと肌感覚、そういうものを感じ出せるのが神戸の一番の魅力だと思います。

神戸には山もあり、海もあります。そしてどうしても神戸というと都市に集中しがちですが、東京の人でも神戸を想像すると、新幹線で新神戸駅を降りて三宮から元町に至る小さな都市エリアを神戸と呼んでいるのではないかという気がします。私もこのエリアを何往復も歩いて1足の靴を買ったりしますが、このコンパクトさが魅力だと思います。でも神戸の魅力はこの小さな街の中だけではありません。山を越えると裏側の六甲には温泉があり四季豊かな森があります。こういう自然の恵みにあふれているのに都市である。これは何と言っても神戸の魅力ですが、どうしても小さいところに集中しがちです。神戸の魅力というのはこの大きさ、山であり、海であり、野であり、田園であり、自然の恵みの中に人間が生きて呼吸して、そして愛する人たちと家庭を作ってきた歴史が神戸の魅力。そんな気がします。

今、人の魅力、女性の魅力と言いましたが、ここから逆に課題が見えてきます。今の神

戸が、ここに住みたい、ここで家庭を作りたい、女性が生き生きとここで暮らしたいと思う街かという、林先生が再三ご指摘なさっていましたが、神戸だけの問題ではありませんが、日本全体が少子化で人口がどんどん減ってきています。人口が少ないから活気がないし、パワーもないし、人口の多い東京に負けるわけです。でも神戸に出てくると、ほんとうに不景気かというくらい街は人で溢れ、活気もあります。ただ、今の瞬間、次の瞬間、10年の瞬間は大丈夫かもしれませんが、30年先の神戸がどうだろうかと考えた時に果たしてどうだろうかと考えてしまいます。

少子化を解決するには子どもを産む必要がありますが、果たして子どもが産まれる街であるかどうかということです。子どもを産むのは決して女性だけの問題ではなく、幸せな家庭で安定した経済に支えられ、何の心配もなく子どもを精神的に豊かに育てられる環境が大事で、それこそが少子化の解決につながると思います。そういう意味では、今の神戸にできそうなことも、できなさそうなことも見えてきます。家庭を持てる街であるのかどうか。大金持ちばかり来てもらって税金を落としてもらっても、神戸の収入になるかもしれませんが、大金持ちといえども1組の夫婦が産める子どもの数は2人か3人に限られています。それよりもその下の中間層である、そこそこの収入があり、そこそこ満ちていて、そこそこ幸せである、この「そこそこ」というのがポイントなんです。神戸の言葉、関西弁の言葉で、ほどらい、といえます。突き抜けてお金持ちでなくてもいい、突き抜けて貧乏というのも困る。でも、ほどらいのお金があって、ほどらいの幸せがある。そういう家庭でこそ子どもがたくさん生まれ、子どもが幸せに育つわけで、神戸は子どもの笑顔が増えていく街になる可能性をたくさん秘めていると思います。なぜならほどらいの街であり、ほどらいの自然がある。若いカップルにどんどん来ていただきたいです。そういう仕掛けというのは矢田市長に意見をお伺いしたいのですが、若い年代のカップルが来ていただけるような仕組みを市のほうでやっていただかないといけませんし、そこに住む私たちにできることとして、神戸にいるとこんなに幸せに暮らせるという発信もしていかなければならないと思います。

もう一つの課題についてお話しします。大きな文学賞をいただいた作品に「お家さん」という神戸を描いた作品があります。これは日本一の年商をあげた大商社である鈴木商店があった、神戸が最も輝いた時代を書いた小説ですが、なぜ輝いていたのか。皆さんは種子島に鉄砲が来たのを覚えていますか。1543年でしたか。たった2丁の鉄砲がきたのに、その40数年後の織田信長が武田勢を破った戦いには世界で一番鉄砲の保有量が多くなっていました。それほど短期間に鉄砲を量産してしまうほど、ものづくりのテクニクとパワーを持った国であるわけですが、残念ながら資源に乏しかった。それに気がついた鈴木商店の大番頭、金子直吉という豪傑は、日本の生きる道は、資源がないから資源を輸入し、ものづくりという人間の力で加工して、それをまた神戸港から売ったらいいではないかということで、加工貿易を行いました。ところが世界の交通手段が、船から陸路、飛行機に変わる中で神戸が忘れられていってしまうわけです。私は決して過去の栄光にすぎる気は

ないですが、ここにも林先生と一致するヒントがありました。グローバル化です。鈴木商店はすでに 100 年前にそれをやっていました。東海道本線という鉄道の終着駅としてつくられたのが神戸駅でした。地果つる街だったわけです。ところが地面は終わってしまうが、神戸へ来ると海が始まる、世界が始まる街である。こういう逆転の発想によって世界一の年商を達成した商社が実際にあったわけです。彼らはどこ取引したかという、日本国内を相手にせず、台湾、東南アジアを相手にして一つのエリアと考え、これこそまさに先生が提案された、周辺神戸、亜神戸の発想です。海を越えて、台湾、韓国、フィリピン、インドネシアを含めての亜神戸を構築すればまだまだ神戸にはチャンスがあると思います。

私が小学校の時は、神戸港が世界第二の国際港と習ったのですが、今はどんどんランクが下がって今や大阪にも負けています。震災の影響があり、その時に韓国の釜山はがんばった。これを修復、再生するのは難しいということですが、神戸がだめになったから次のところへ行ったのはまさにその通りですが、これは動物的思考方だと思います。動物はエサを食べ尽くすと餌場として成り立たないからと違う狩場に移っていく。牧畜もそう。羊の群れは草を食べつくして砂漠になると、違うオアシスを探して移動していく。日本人はもともと肉食の民族ではなく、米を食べる以前も森に入って木の実を食べていました。植物的発想に戻ると、そこに根を生やし、いったん木は枯れても、いろんないこぼえ、枯れた木が新たな芽を必死で出し、命を吹き返そうとする自然の力があるはず。再生する力は持っているはず。その力はあるけどそれをどう生かすか。神戸港の再生についても後で市長に伺いたいのですが、課題はそこだと思います。神戸の魅力を生かして、若い夫婦が子どもを生み育て、家庭を築き、根を生やし、植物的な人生設計をして周辺を巻き込み、そして海のかなたを見ながら周辺神戸の栄光をもう一度つくっていく。そういうことができればまだまだ神戸は大好きな街になるでしょうし、雑誌が特集を組む時は東京に対抗できる相手として登場できると思っています。

司会)

広域神戸人としてのご発言でございました。玉岡さんのように外から神戸を見る、また中から見ることで魅力は変わってくると思います。では高土さん。メディアのトップ、企業のトップとして神戸の魅力、課題を挙げていただけますでしょうか。

高土 社長)

玉岡さんが、神戸は人でしょう、女性でしょう、といきなりきたので、そうくるかと思いつながら、反論をしようと思いましたができない。おっしゃるとおり神戸は女性です。学校基本調査では、4 年制大学で男子より女子学生数が多いのは、唯一兵庫県だけです。20 ある政令指定都市の中で、女子学生比率が最も高いのは神戸です。神戸市だけに限るとやや男子学生のほうが多いですが、ほぼ拮抗しています。女性大学教員の数は、神戸は東京 23 区と京都に次いで第 3 位。これも大学の数からすると大変に高い比率で、やはり神戸は

女性の街、その通りでございます。神戸の魅力と、もっとこうあったらいいのになという改善点がメインの課題ですので、そこに触れたいと思いますが、これも玉岡さんがほとんどお話されました。

住む街、働く街、自然と都市がほどよく両方ある、というのが神戸の魅力です。山と海、これも昔から言われてきたことですが、先ほどからの都市論、大都市制度論の絡みでいうならば、神戸は良きも悪しきもすべてが六甲山だと思います。神戸は地政学的にいうとやや西にあるものの、東西交通の要、そこが海に開かれているということですから、大変優位、有利な土地です。

その昔、大阪が低湿地であった頃、もし神戸に六甲山がなければ、この地がもし播磨平野であったなら、神戸は大変な巨大都市になっています。そうなるのをうまく妨げてくれたのは六甲山、そういう意味では神戸の制約でもありました。あの山をぶち抜きたい。現実には相当ぶち抜いていますが、こういう発想は昔からあったと思います。しかしあの山があるおかげで、神戸は数々の魅力ある街になっています。これは制約と裏表の関係です。その六甲山があるゆえに、例えば神戸都市圏という発想をしても限定的なものになってくる。逆説的ですが、これは六甲山のおかげといってもよいかと思えます。

東西交通の結節点であるということと、この土地と風土が神戸の魅力を引き出している。そこに先端技術が集積し、新しい希望の芽が出ているのも、地政学のなせる業かなという気がします。経済的には相当地盤沈下をしています、しかし強みがたくさんあります。この強み、魅力、価値ですね。ここに目を向けていきたいと思えます。

望む改善点ということについて言うと、神戸は明治以来まさに外国への窓口として新しい物をどんどん取り入れてきました。戦後、港の機能がだんだん地盤沈下した時代でさえ、神戸市、これは市役所ということになりますが、神戸市が先頭になって世界の潮流を見極めながら、新たな都市像を打ち出し、都市づくりの先導役を担う形で神戸の活力をしっかりと引っ張ってきていただいた。そして神戸の目指す都市像はいくつもの言葉になってきました。ファッション都市、アーバンリゾート都市といった時もあった。コンベンション都市とも言いました。そして今は医療産業都市であり、デザイン都市です。この中で定着したのはファッション都市、コンベンション都市と医療産業都市でしょうか。概念だけはなんとなく分かるけど、どうも十分に胸に落ちてこないという都市像は、なかなか定着せずにきているのかなと思えます。こうした概念、都市づくりのイメージは、主に役所の方々や経済界が外国でその種を見つけ、神戸に引き寄せてイメージを膨らませるという打ち出し方をしてきた。この進取の精神をいま、決して磨耗させてはならない。もっともっと磨いていただきたいなと思えます。日本の都市の中で世界に開かれた感度のよさはしっかりと磨いていただきたい。とお話する裏には、その感度がちょっと落ちているのではないかという懸念があるわけです。

今言ったことが進取の精神を回復させるということであるとすれば、もう一つは神戸にすでにある既存価値を重視する、ということです。玉岡さんの「お家さん」に出てくる舞

台は今の神戸の旧居留地、栄町通あたりですが、鈴木商店がどこで創業したか皆さん分かりますか。大正 7 年の米騒動で鈴木商店が焼き討ちされた場所は分かりますか。平清盛が放映され、神戸の歴史に今改めて光が当たっています。平家の時代、源平合戦の時代、そして江戸期を通じての兵庫津の繁栄と豊かな歴史がありますが、神戸が本当に輝いたのは近代に入ってからで、近代産業勃興の舞台になった。人口も東京、大阪に次いで全国第 3 位という大都市だった時期がありました。工業製品の出荷も同様でした。大変なドラマがあったわけです。日本を代表する企業の根っこがいくつも神戸にあった。それをもっと大事にしたい。まずは市民の人が分かるように、市民が分かれば外から来るお客さんも分かる。極論すれば電柱でもいい。鈴木商店が創業した場所はここですよというように、街を歩けば神戸の豊かな歴史が理解できるように、ぜひ仕掛けをしてもらいたいと思います。

進取の精神を、新しいものにチャレンジする精神を磨耗させない。それと、これまで長らくスクラップアンドビルドに多忙であったために、ともすればおろそかになっていた神戸の豊かな歴史を再認識する仕掛け。その両方をぜひ持っていただきたいと思っています。

企業という立場でいえば、経済はグローバル化し、神戸の多くの企業は東京に本社機能を移したわけですが、神戸製鋼、川崎重工にしても、依然として相当大きな機能を神戸に置いています。ネスレ日本がなぜ神戸から動かないのか。グローバル化し、通信機能が爆発的に向上し、マンツーマンで直接会話をする刺激は東京にはかなわないでしょうが、情報を取るということに関していうと、世界どこでもいいという時代に入ってきています。そんな時に企業が重視するのは、住みやすさ、暮らしやすさ、土地の快適さではないかと思います。そういう意味では経済活動の拠点を置く土地としても、大変優れたものを依然として神戸は持っているのです。

司会)

ここまで玉岡さん、高土さんに神戸の魅力、そしてまた課題をお話をいただきましたが、ここまでお聞きになって林先生いかがでしょうか。

林 教授)

神戸というのは今のところまだ全国ブランドなんです。そのようにあり続けていただきたいと思っています。関西学院は西宮の上ヶ原にキャンパスがあり、もうひとつは三田にキャンパスがあります。三田は「さんだ」ですが、東京の人にとっては「みた」と言われる可能性もあります。そこで認知度が低いから、三田市にありながら神戸三田キャンパスという名前にしています。神戸をつけることによって全国から受験生を呼べるのではないかと。ところが今は大学も首都圏一極集中です。関西学院はなんとかがんばって大学の魅力を上げよう、学生を呼ぼうと努力していますが、大学がいくらがんばってやろうとしても限度があります。文部科学省のいろいろな規制があって、そしてお伺いを立てないといけないため、自由にできないのです。関西の大学が次々に東京に拠点を設ける中で、関西

学院はキャンパスを持っていなかったのですが、数年前にやはり東京にも拠点を一部設けないとなかなか情報入ってこないということもあり作りました。就職活動をする学生が東京キャンパスで情報収集したり休憩したりすることにも使っています。東京に事務所を置かないとどうもうまく活動ができないというようなことは日本の大きなネックだと思っています。神戸の問題というよりむしろ日本全体の問題が今いろんなところで露呈しているのではないかという気がします。こんなに住みやすい神戸になぜ企業は来ないのだろうか。なぜ生活満足度の低い東京に人々は住むのだろうか。ということをもう一度真剣に考えないといけないと思います。

内閣府は生活満足度調査をしています。福井県、富山県、北海道が満足度が高いわけですが、生活満足度が高いのならそこに多くの人が住むはずですが、ところが今人口が増えているのは、生活満足度が一番低いといわれている東京です。このような実態をそのまま放置して何が日本人の生活満足度を高めることになるのかということです。調査をした結果がランキングで終わっていることも問題です。どこが一番住みやすい、一番住みにくいで終わっているのが、新聞のランキングです。ですが、そこからもう一つ突っ込んでいただきたい。じゃあなぜこれだけ生活満足度が高いところで人口が減っているのか。そこに日本の問題点が隠されているのではないか。

実は私の大学でも最近、広島県庁と大学の間で就職の連携を強化しようということを行っています。なぜかという広島のような大都市ですら大阪、東京に出て行った人が戻ってこないという実態に悩んでいるわけです。なぜなら、若い人たちにとっての魅力的な働く場があるかないかという問題があるわけです。確かに北陸地方の生活満足度が高いとしても、若い人たちにとっての生活満足度が高いのかということやはりそうではない、というように考えていく必要があります。神戸は生活満足度が高いにもかかわらず、なぜ経済的に疲弊しているのか。暮らしやすさやトータルで考えれば神戸はものすごく力があるはずなのに、それが機能していないのはなぜだろう。このように考えて、神戸は神戸らしさをもっと徹底的に追求していただきたいと思います。

バブルの時に神戸市の方とお話をしていた、河原町と三宮でどちらが地価が高いかを競い合っていた傾向がありました。実は京都の河原町と神戸の三宮は、まちづくりとしてはあまり大きく違わない。でも京都の顔は河原町にあるわけではない。神戸の顔は三宮とは違うところにもっと神戸らしいところがあるような気がする。だから神戸らしいまちづくりをしていただきたい。そのためには神戸の歴史を踏まえて、市民の方々がどのように考えているのかを踏まえながら、神戸のあるべき姿を模索していけば、より個性のある神戸の街ができあがっていくし、それが全国ブランドをさらに高めていくし、世界のブランドになっていくと思います。

昔、私の恩師が街を色で例えようと質問を投げかけてきました。ボストンは何色だと思う、と。茶色ですかね。ワシントンは白ですかね。建物の色で決まっているようなイメージですが、じゃあニューヨークはどうだと聞かれたときに、先生は黒だとおっしゃった。

いろんな人が、つまりいろんな色が重なると黒になるからです。そこで、神戸市は一体今後どのような色にしていくのだろうか。大阪はいろんな色が交じり合っていますからおそらく黒に見えていく可能性がある。京都は違うでしょう、神戸も違うでしょう。おそらくヨーロッパの有名な都市にはそれぞれその都市にふさわしい匂いがあり色があり景観があります。そういうものをこれから神戸は求めていく必要がある。京阪神エリアのように、こんなに大きな都市がこれだけの近距離にあるのは世界広しといえどもここにしかありません。なぜこれが生かされないのだろうかと考えた時に、よく仲良くしていくべきではないかという声が聞こえてきますが、実は私は都市連携というのは仲良くするということだとは思っていません。仲良くすることも大事ですが、神戸、大阪、京都がそれぞれ独自性をもっと強く発揮していく。そのことによって神戸に来る人は京都にも、大阪にも行きたいというような棲み分け、機能分担、役割分担をもっと明確に打ち出せる都市作りが必要ではないかという気がしています。では、神戸をどのような色に染めるのか、市民が真剣に考えていかないといけない。そういう時期に来ていると思います。

もう一つだけ課題を申し上げたい。今日ここに来る前に旧居留地の辺りを歩きました。神戸にはよく来るのですが、昔に比べてずいぶん散策できる街になった。おそらくこんなすばらしい街は日本では余りないでしょう。もちろん東京には一つのエリアの中にビジネス街があり、旧居留地的なところもあって、それらを包含しているのが東京です。でも神戸の魅力はそういうところが散歩ができる範囲にあるということにあるのではないのでしょうか。かつては北野町あたりだけであったものが、今や旧居留地の海側も散歩ができる街になっています。たくさんの路面店が並んでいてファッショナブルな街に変わっていった。ただ心配なのは人通りです。今、大阪駅のステーションシティというところでどんどん開発をして、京都、神戸と競合してしまっている。でも大阪と同じことやっても規模には勝てません。その中で大阪に寄った人がやっぱり神戸にも寄りたい。大阪から30分で神戸に来られるわけですから。そういう街づくりをしていくことによってもっとにぎわいをさらに大きくしてほしい。こういうものをどうやってこれから作っていくのか。市民も協力しなければいけません。景観もものすごく大事にしないとイケないでしょう。

よく日本の街の混沌としている風景を作り出している一つの理由に、電柱があるからだという指摘を聞きます。私もそのように思います。ヨーロッパの街、世界で美しい街といわれているところは電柱はなく、地中化されています。だから日本でもそのようにしたらどうだという声がありますが、ヨーロッパの街が地中化によって美しくなっているのは、街それ自体が美しいからです。だから日本で電柱を地中化すれば少しは美しくなるかもしれませんが、それにふさわしい街づくりをしていかないといけない。このように思います。

もう一点だけ。実は明日私の家に来客があります。せっかく神戸に来るので神戸らしいお土産を持って帰っていただくと思い、日持ちするクッキーを買って帰ろうと思っていました。そこで場所を調べるためにインターネットを見たら、その店はなんと大阪にもあるし、東京にもあるし、横浜にもある。これでは神戸らしいお土産にはならないんですね。



ところが悩ましい問題があります。企業単体としてはやはり売り上げを増やしたい、これが資本主義の哲学ですから、当然儲かるものはあちこちに支店を作りましょうとなるわけですが、実はその結果、神戸に行かないとこれが手に入らないということではなくなってしまっている。つまり企業の願いと地域の願いがうまく一致しないのです。これを一致させることによって企業にとっても地域にとってもハッピーだということをこれから本気で考えないといけません。それがガバナンスで、それが自治体の役割なのではないか。というような、これが神戸にとっての今の課題ではないかと思っています。

司会)

お土産についても神戸らしさが必要だということですね。さて、ここまで魅力と課題が出ましたが、矢田市長いかがでしょうか。

矢田 市長)

まず玉岡さんのお話の中で港の話がありました。まず港がやはり神戸の象徴的なものであり、また神戸の経済を支える大きな要素でもあります。しかし実際に阪神・淡路大震災で神戸港が壊滅的な被害を受けた時に、やはり物流というものは、一日として止まることはありませんので、神戸でだめなら他の地域で物流をさばかないといけないということになり、修復するまでの1年半の間に神戸にそれまで集荷していたものが日本の各港に移りました。さらに、韓国の釜山や台湾の高雄というような地域にかなり荷物がシフトしました。また、それまで中国はだいたい神戸港を使って貨物を基幹航路に乗せていたわけですが、中国で製造拠点ができるに従い、非常に大規模な港が中国にできた結果、そのあおりでそれまで神戸に来ていたトランシップ貨物が全く神戸にやって来なくなったということがあります。それに加えて震災で日本の各拠点からも他港へ荷物が出ていったわけですが、その中で釜山に貨物を相当シフトされている。それは何かというと、非常にインセンティブをつけて、そしてその中で神戸に持ってこずに釜山の方が安くつくということで、神戸の荷物が他に流れてしまったわけです。それではいけないということで、現在、国家としてコンテナ戦略を立て直そうということで、東京・横浜の京浜港と、大阪・神戸の阪神港に主力の基幹航路を設定しながら荷物を集めようとしています。以前のようなランキングトップ3というような状況には当面はなるすべもありません。というのは、例えばシンガポール、香港が非常に大きな地位を占めていましたが、現在、世界の中でナンバーワンは実は上海です。上海の沖合だいたい30キロのところに8車線の橋を作り、洋山深水港を整備しそこで一元管理をして、そこから直接基幹航路に乗せていくという形をとっています。大連、青島、天津など各拠点で動きが進んでいるため、東アジア全体を見る時に、これからの神戸の港の物流をどうするかということになってくると製造拠点も相当重要だし、また国内の拠点がいかに数多く存在するかということも視野に入れておかないといけません。そしてさらにそれに対して必要なのはインセンティブです。これは港湾管理者だ

けではなく、実際に事業者も相当な力を入れていかないとだめな状況になってしまうという事で、お互いが力を合わせて対応をしていこうとしています。

日本は、やはり何と云っても貿易立国として存在をし続けていかなければ国の存在は非常に危ういものがあります。その中で高度な技術を持ちながら、それを生かしていくかを考えた時に、海外へ出ていく企業がたくさんありますが、そこでいかに日本で新しいコアの技術を生み出しながら保有しているかということがかなり重要だと思います。そういう視点でやっていかなければ、実際にわが国の技術が流出してしまうこともあるので、このジレンマみたいなものがなくなるよう神戸がものづくりの拠点として機能を続けていくことが大変重要です。

そして新しい分野に対しての取り組みも必要です。阪神・淡路大震災の被害の中から 18 年経って今日に至っていますが、そういう中でこれから先を見た事業として、神戸が目指そうとしているのは、知の拠点をいかに形成するかということです。そのためには人材が大事で、いかに優れた人材にこの地で集まっていただき、育てていくということの支援も併せて持たないとだめだということです。

一つの例として挙げると、震災後にスタートし、ポートアイランド 2 期で進めているバイオライフサイエンスの拠点、医療産業都市です。企業が集積し、大学もきています。さらに現在世界最速のスーパーコンピュータである「京」も誘致しました。「京」は 1 秒間に 1 兆の 1 万倍の計算ができる機械ですが、こういうものを駆使してこれからどんどん先端分野の研究の企業なり大学なり、世界から人材が集まってこれを使っていただくことが当面の目標です。これを継続していくには技術の集積をどう繋いでいくかという点も大事です。瞬時にしてランキングが変わる世の中ですから、そういう点での取り組みは国を挙げて考えないといけません。神戸がこれをどう生かしていくかが大変重要な視点です。

それともう一つ、神戸で新しく生み出そうとしているのが、デザイン都市です。これはユネスコが新たに世界創造都市ネットワークをつくらうと提唱したもので、世界の各都市がいくつかのジャンルに分かれて切磋琢磨していくわけですが、その中にデザインの分野があり、神戸はそれに手を挙げて、2008 年 10 月に認定を受けました。これは、ものづくり、まちづくり、あるいは人づくりの視点でデザインをこれから動かしていこうとしています。これも知の拠点の取り組みの一つになりますし、街そのものの形を、神戸にしかないものを目指してやっていく際に、デザインを生かしながらやっていくことが大変重要ではないかと考えています。

昭和 40 年代後半にファッション都市を打ち出しましたが、震災後に「神戸コレクション」ということで世界にも出ていくというかたちになってきました。新しい視野に立って、神戸が強みとして出していけるものがあるのではないかとという視点に立って多くの人が集まっていたような街にしていきたいと考えています。

いずれにせよ、いろんな方の意見もお聞きし、まさに市民と企業と自治体と林先生がおっしゃいましたが、ものを作り上げていく時に、そのような形態をベースにしながら取り

組みをやり遂げていくという思いでやっています。その時に国に言うておきたいのは、全体として今の既存価値を重視する余り、新しいものに対応する規制緩和が大変遅れているということです。これを解消していかないことには、これからの国の新たな踏み出しはなかなか期待できないと思います。韓国は1998年に金融危機がありましたが、今はその跡形もありません。ものすごい勢いで展開をしていますが、それは政治形態もありますが、規制緩和を相当強く意識してやっている、その結果だと思います。そういう点で神戸は時間が必要かもしれませんが、規制をなくし、新しいものに結び付けていけるようなそういう街を目指していきたいと考えています。

司会)

制度論の話からするのはいかなものかというお話が林先生からありましたが、私が一市民として思うのは関西州、大阪都構想、関西広域連合といろいろ制度の話が出てきており、そういう大枠がいろいろとある中で市民はどう見ておけばよいのでしょうか。神戸市は関西広域連合に8月に加盟するというのですが、市民の立ち位置はどうなるのでしょうか。

林 教授)

これは非常に難しい問題です。関西広域連合ができればすべて問題が解決するという話ではありません。ですが、関西広域連合はまさに広域連携ですから、私が重要だと申し上げてきたパートナーシップを県境を越えて手を結びながら関西全体の発展をしていこうということです。ただ、今のままでそれが出来るかというと、十分なことはできないと思っています。もっと思い切ったことをやってほしい。県境が残ってしまうと、たとえば経済の力がどこかに集中してしまったら、その県のひとり勝ち、独占状態になってしまいます。私たちが考えているのは、たとえば九州であれば福岡で生まれた経済もすべて九州のものだのように考えた方がいいのではないかと考えているわけです。そういうところに関西広域連合が一步でも近づけばうれしい。ただ一方、関西エリアの全ての行政ができるわけではありませんので、やはり大都市がコアにならないといけないわけです。これからの経済発展は経済が多様でなければいけないし、いろんな集積もなければいけない。そう考えると、やはり神戸とか大阪、京都というコアになる都市がそれなりに力を発揮しないとダメです。核になる都市以上の地域にはならないのです。リーダー以上の組織にもならないのです。地域をがんばって元気にしようと思えば、コアになる都市ががんばらなければならないのです。

そのようなことを考えたら、大都市というのは制度論も確かに大事なのですが、財源がありません。財源がないから、今は国と地方の間で取り合いをするとか、権限も県と市の間で取り合いをするという話をしています。しかし、むしろビジョンを共有化して、そしてどのようなシステムを作っていけばこの地域の将来世代、あるいはその次の世代がもっ

とハッピーに生きられるのかというようなことを、もっと真剣に議論する場として関西広域連合が機能していただくと、その中で神戸が果たすべき役割が明確に見えてくるのではないのでしょうか。制度論に走る前に、そういうところをもう少し議論をしていただいて、関西広域連合も単なる行政の今の守備範囲の中で議論をせずに、ということをお願いしています。

司会)

玉岡さんもいろいろなところでコメンテーターとして発言されていますが、こういう制度、枠組みの話で感じることはございますか。

玉岡 氏)

災害が起きた時に、関西広域連合がありながらすぐに援助の手がいかんかったりと、もどかしいところがあって、機能するまでにはもう少し時間がかかるのかなと思いました。今の林先生のお話の関連ですが、神戸の果たすべき役割、神戸に何ができるかを考えると、やはり神戸は関西広域連合に入るとこの街とも違うものを持っていると思います。これが個性ですが、どこにでもある一地方都市ではないわけです。

神戸のまちは、井伊直弼が天皇陛下のお許しなしに海外と貿易をする港を開くという、その歴史的な時にいきなり歴史の中央ステージに出てきたわけです。その原点に返ると、神戸がほかの街と全然違うということが思い出される。やはり海外に向かう港を持っている。狭い土地ではなくてグローバルな視野を持っている。この視点があれば全然違う意見が言えるし、全然違う役割が果たせる。そういう意味で市長に港湾のことを教えていただいて納得がいきましたが、神戸がいくらがんばっても、まず国自体が神戸の国際港の重要性を考えてくれないといけないということをしみじみ思いました。

それに重ねていきますと、林先生がこれからの課題を投げられましたが、解決法は全部用意されています。林先生が街の色の話をされました。東京は余りにもいろいろなものがあって黒というのですが、京都は和柄でしょうか。大阪はヒョウ柄でしょうか。神戸はやはり光沢のあるパステルカラーを思い浮かべます。なぜかというと海の霧であったり、山から降りてくる風がぼんやりしている。やはり港がカギを握っているのです。林先生はお土産のことも言ってくださいましたが、昔の神戸土産というとチョコレート、舶来物と言われていました。神戸に行かないとチョコレート、クッキーはなかったんですが、今は田舎の街でもフランス菓子を売っているわけです。亡命ロシア人がチョコレートをもたらしたというのは有名な話ですが、そこに戻っていただかないと。

この間、282年ぶりの金環日食を神戸で見ました。どこで見るか、このポイントしかないと考えたのは海の上でした。クルーズ船に乗って見たら、さえぎられるものもなく、明石海峡大橋が見え、大阪湾が霞んでいる。神戸にしかない景色が広がっていた。そういう素晴らしいものを持っている。神戸はあまりにも地方都市と肩を並べて仲良しでやっていこ

うとしていますが、最初から俺らはあんたらとは違うんやという気概で臨んでいくと、違うことが出来るのではないのでしょうか。連合で仲良くすることも大事ですが、それぞれの個性を生かしながら私にできることをさせていただくというスタンスでないと、いつまでも神戸は一地方都市で終わってしまうし、陸果つる街、鉄道が終わる街で終わってしまう。でもここから海が始まり、世界が始まり、国際的視野が始まり、日本の歴史が始まったということをもっと誇りに思って、そこから考えていけば、神戸は課題なんか持っていない。解決策を全部持っているのです。全部解決して差し上げることが出来ると思います。あとは国策です。国の力でもう一回神戸の大事さを見ていただき、指定都市の中でも神戸みたいな街はないということのを再認識するところから始まっていくと思います。

司会)

最後になりますが、高士さん、補足するところがあれば。

高士 社長)

神戸にふさわしい都市制度を考えた場合に、大阪都、中京都、新潟州、これは府県と政令市が一体になる、あるいは政令市を解体するということですが、これは兵庫県、神戸市の関係では考えられないというのが大前提になります。なぜかという神戸の色で兵庫全域の色が塗れるわけではないからです。神戸の色もあれば、姫路の色もある。いろいろな色が兵庫では混ざり合っています。神戸の港をしっかりと築いていこうという明治維新以降の政策によって、歴史的な一体性のないエリアが人為的に引っ付いて大きな県になったという兵庫の成り立ちからしても、県市の一体化は現実的ではありません。そうすると神戸にふさわしい制度論というと、今の神戸市、あるいは周辺も含めた神戸市圏、神戸エリアをベースにした絵を描いていくことになります。そうすると指定都市市長会が提案した特別自治市という制度に思い至ります。政令市が府県から独立しようという話です。大きな方向性としては、この特別自治市のような方向なんだろうなとはぼんやりと思っています。しかし、こういう話になると、国も権限を手離すことになるし、府県と政令市もなかなか意見が一致しないので、どう進んでいくのか、まるで見えてきません。市民の目には、首長さん同士が権限争いをしているように見えかねない状態でしょう。

基本に立ち戻ると、みんなが暮らしている街に誇りを持って、人と人のつながりを強めて、街の将来をみんなで考え、その絵がきちんと実現できる仕掛けを作ることが大切なんです。住民自治、市民自治が大事だから地方分権、地方主権を進めていこうという話になっている。そう考えた場合に、林先生が講演でおっしゃっていた都市内分権が一つの示唆を与えてくれます。矢田市長は相当明確にその方向を出していますが、神戸でいうと区の権限をしっかりと強めて住民自治、市民自治というものがどのようなものかということ、みんなが分かるようにしていくことが非常に大事ではないかと思います。150万人という非常に大きい規模ですから、区レベルでともに将来を考えるのが現実的規模でしょう。今

は市の権限の一部を区長さんに降ろしたということですが、思い切って区議会もどきまで作って、区で物事を考えるということをお民がわかる仕掛けにしていくことが大事だと思います。神戸がいわば都市コミュニティづくりの先駆けになって、地方主権を具体的に提起するまちになってほしいと思っています。

司会)

矢田市長今のお話をお聞きになられていかがでしょうか。

矢田 市長)

実際に原点は地域にあります。地域がしっかりしないと街というものは足腰がしっかりしません。地域の皆さん方にいろんな場面で主体になっていただいて、それを我々が支援するというようなかたちでやっていますが、たとえば神戸市は9つの区があって、各区に区政があるわけです。それをどのように生かしていくかという時に、我々も行政サイドからああしてほしいこうしてほしいという注文はしません。むしろ、まちづくり会議を住民のみなさんに作っていただいて、その中で物事を決めていく。そしてそれを実行できたか検証しながら進めて、期限を切ってまた次の段階に移っていくというやり方です。そうするのはなぜかという、地方分権、地域主権といわれることで一番大切なことは、暮らしている人間が暮らしの実態に合わせて自分たちの責任でもって、自ら実現したいものをするということです。これをなんとか形として表していくために、地方分権ということをお願い続けてきているわけで、権限、財源を整備しないと形になりません。そのために何度も何度も議論をしているわけです。丹羽宇一郎中国大使が分権改革推進委員会の委員長をなさってまとめられたものがありますが、その内容が今どれくらい出来たかという何もできていない。指定都市市長会の中で意見を交わしたときに、それならばもっと我々は意見を強めて、まず大都市が先頭を切ってやらないとだめだと。そうすると、今の形態を打ち破り、直接国とやり取りし、しかも国の範疇もある程度限られたものに変えていただく。その中で、地方が責任を持ってそれに対処するというやり方を考えていくべきではないかということで特別自治市を提案しているわけです。そのあり方については、例えば大阪は大阪都構想ということで府と市を一緒にして市を解体するということを言っています。中京都は減税ということを中心に、愛知県と名古屋市でどんなかたちにするかまだ見えていません。新潟州というのも見えていない状況です。いずれにせよ、一番大事なことは住民が自治という観点で物事に対処していく。今の時代、いろんな形のしがらみの中で回っている状態だと思います。何度も言いますが、規制でがんじがらめになっているのを解きほぐして、規制緩和をしていかないとこの国の成長は止まっていく、むしろ劣化していくと思っています。

司会)

神戸の街は昔から縛りを嫌う街と言われていました。そういう規制緩和も当然国に対しても県に対してもっと求めていくべきでしょうし、また林先生から、制度改革をする場合には副作用が付きまとうというお話がありましたが、その副作用がどんなものかということをお話を我々市民が納得した上で、それに耐えうる自分たちの住民自治を成し遂げられたらなと思います。